

[理事長挨拶]

## 第31期理事長のご挨拶

理事長 廣 田 勇\*

この度改選されました第31期日本気象学会新理事会の決定によって、前期より引き続いて理事長の任を引き受けることになりました。過去2年間の経験を生かし精一杯の努力を続けたいと考えておりますので会員各位のご支援ご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。理事長代理には、これも前期に引き続き二宮洗三理事にお願いしてその任に当たっていただくことになりました。また、学会運営の各種委員会にはそれぞれの分野で経験豊富な理事の諸氏がしっかりと役割分担をなさって下さるので心強く感じております。

さて、第30期にはいくつかの大きな課題がありました。そのひとつは、社団法人としての日本気象学会の定款改定に伴う総会成立条件の変更です。春季大会における総会に、委任状を含め会員総数の二分の一以上の参加が必要という厳しい条件を満たすことが出来るかどうか危惧されましたが、理事諸氏のご尽力と会員の皆様方のご理解により、無事難関を乗り切ることが出来ました。もちろんこれは1回限りのことではなく今後も同様にご協力をお願いしなければならない事柄ですが、春季大会のご挨拶の中でも申し上げましたように、これをひとつの契機として、学会活動は会員全体の参加によって成り立っているということの認識が深まれば幸いに存ずる次第です。

30期のもうひとつの大きな収穫は、従来ややもすれば儀礼的色彩のなくなかった評議員会を実のあるものとするため、気象学と一般社会の接点としての啓蒙普及教育活動に関する問題を提起して有識者各位のご高見を伺った結果、地球環境問題を学会としてどう受け止め、またその学問的研究成果をどう学会外部に伝えて行くべきかの宿題が与えられたことです。

これを受けて、30期理事会の中にこの問題に関する

検討作業部会を設け、数名の専門家による議論を進めた結果、31期には田中 浩氏を主担当理事とする正式な委員会を発足させ一層充実した検討を行なうことになりました。

前期の評議員会ではさらに、小倉義光名誉会員から、近年の気象学の発展に伴う新しい学術用語の統一に関する問題が提起されました。これも31期の宿題のひとつとして、二宮理事を中心とした新しい委員会で検討を進めて行く予定です。

この数年、学会員は大学院生等の若い世代を含めその数が急増してきました。これは学会の発展のためによるこぶべきことですが、大切なのは活動内容の質的充実です。学会の目的が定款第4条に謳われているとおり「気象学の研究を盛んにし、…学術文化の発達に寄与すること」であることは言うまでもありません。それを具体的な形で実現してゆくために、31期の方針のひとつとして「若手研究者諸氏の学会活動への積極的参加」を呼びかけたいと考えています。

次世代の気象学を担うべき20代30代の人々にとって一番大切なことは、当然のことながらそれぞれの置かれている立場や目標とする課題に応じた優れた研究成果を国内外に発表して切磋琢磨を重ねてゆくことです。その成果は、たとえば学会の各賞顕彰などの形で正しい評価を受けることになります。そしてそのような発展を生み出す場としての望ましい学会活動のあり方に関しても、各自の立場から、各種委員会の役割分担をはじめとして、機関誌の編集、研究会やシンポジウムの開催などについてどしどし建設的な意見・要望を提出していただきたいと希望しております。

31期では、目前にきている世代交代を強く意識して、気象学会に対する中堅・若手会員諸氏の様々な要望を運営に取り入れていく場を設定して行くことをお約束申し上げ就任のご挨拶と致します。

\* 京都大学理学研究科地球物理学教室。